

深谷地区の外国人への日本語支援

深谷にほんごクラブ
後藤 信昭

1 はじめに

(1) 深谷にほんごクラブの概要

当クラブは平成18年に有志がボランティア活動として設立した。近年、在留外国人が増加する中、日本での生活に必須な日本語の習得に困っている方が多いため少しでも日本語や日本の文化を理解できるよう支援をしている。

ア 会場 市内公民館を借り、定期的に学習日を設け、実施している。

イ 参加料金 学習者への負担を少なくするため無料としている。

ウ 活動日 コロナ前は毎月水曜日4回、第2、第4日曜日の計6回開催していた。
コロナ後は毎月2回、日曜日の14時～16時の2時間行っている。

エ 運営 市から公民館の部屋の使用料について支援を受けている。

(2) 参加者

ア ボランティア(日本語を教える人)

ボランティアの参加者には特に決まりはなく、誰でも受け入れている。従って日本語を教える資格や外国語がわからなくても活動できる。募集はチラシ、口コミ等で行っている。定年退職者や教育者、ボランティア活動に興味がある人等が参加している。

最近では、高校生が自分の意思で希望し、活動に参加している。

イ 学習者(主に外国人)

外国人の参加は国別、子供、大人、男女等関係なく受け入れている。主に会社員、留学生、実習生、主婦、子供などが参加している。ほとんどは深谷市在住だが、市外からの参加もあった。

まったく日本語がわからない人も受け入れている。

2 活動内容

(1) 日本語の学習

学習者、ボランティアの状況に合わせ基本的には

1対1の組み合わせで行っている。

教材は日本語の本、資料など学習者に見合ったものを使用している。

学習者が学習したい項目があれば、それに合わせて行っている。

毎回学習記録ノートを作成しているので、ボランティアが変わった場合でも、そのノートを見れば、学習者のレベルや学習内容がわかるようになっている。

日本の文化や生活のルールやマナー等、またフリートークとして雑談の会話も取り入れている。

(2) アイスブレイク

1時間30分連続で学習するので途中にアイスブレイクを取り入れている。

例 ・寸劇 ・体操 ・ジャンケン ・かるた ・折り紙等

(3) イベント

学習者とボランティアのコミュニケーションを深めるために日本の文化等の体験を取り入れている。

最近のイベント例(当クラブ主催)



【学習時間】



【体操】

・習字 ・料理 ・クリスマス会 ・観光 ・花見 ・夏祭り ・七夕等

(4) 周知活動

- ア チラシ配布：英語、中国語、ベトナム語の参加者募集のチラシを作って配布。
- イ SNS、インスタによる状況発信：多くの人に見てもらい参加のきっかけになればと思っている。
- ウ 会報(月2回)で報告：活動報告をボランティアのみに SNS で発信
- エ 口コミによるPR活動

(5) 2024年の活動状況

学習者の多くはアジア系で留学生、実習生などが多く、比較的若い人が多い。

実施期間	2024年1月～2024年12月
学習日	24回
イベント	2回(夏祭り、クリスマス会)
参加された人数	69名
参加者の国籍	13か国
学習された人数	193名(延べ数)
ボランティア	207名(延べ数)
ボランティア	14名(1名退会 2024年12月)

3 成果と課題

(1) 成果

学習者の日本語力がどのくらい上達したか日本語能力試験結果をひとつの目安にしている。

外国人による日本語スピーチコンテストにも毎年参加できるようになり上達度がうかがえる。

学習者が帰国し再度日本に来て訪ねてくれることはボランティア冥利に尽きる。

(2) 課題

ア 学習者が当日の時間にならないと来るか来ないかわからないので、ボランティアの割り振りやレベル合わせなどをその場で行うことになる。

イ 学習者が継続して参加せず、1～2回参加するだけが大半なので安定した内容、進め方などが難しい。

ウ 学習日が月2回だけなので日本語を本当に学びたい人のため学習日を増やすことが望ましいと考えている。

エ 当クラブに参加する学習者は国籍、年齢、性別、職業、その他、宗教や生活習慣等、考え方や感じ方が異なっていて、人権についても問題が起きないとは言いきれない。ただ、教える立場のボランティアは、主に中高年(一部、高校生・大学生を含む)世代が多く、社会経験もあり、学習者と基本的な理解に違いがあることを認識して向かい合っている。これからも各国の文化や生活習慣の違いを認め合い、多様性を受け入れ、お互いの人権を尊重する意識を育てる場であるようにしたい。

(3) 今後の進め方

ア 当クラブで学ぶ外国人の多くは、日本語をほとんど理解せず来日される場合が多く、大半が日本人とのコミュニケーションが取れず困っている。そんな人たちを受け入れ、少しでも日本語力が上達するよう支援したい。

イ 学習者、ボランティア相互のコミュニケーション向上により楽しく学習できるようにし、日本語理解力を高めたい。

ウ 日本の文化、マナーなども取り入れ交流、親睦を高めて行きたい。

エ 日本に住む外国人が自分の人権を守っていくためにも、日本語を理解し、話せるようになることはとても大切であるため、今後も貢献できるよう活動していきたい。



【七夕】

異なる文化を持つ人々と協同して生きていく態度の育成

上里町立上里東小学校
赤根麻莉絵

1 はじめに

(1) 地域・学校の概要

ア 上里町は、埼玉県最北端に位置し、烏川、神流川の2大河川を境にして群馬県と隣接している。この清らかな水と肥沃な土壌に恵まれ、梨やキュウリなど様々な農産物が栽培できる自然豊かな町である。それらの中でも、町のマスコットキャラクター「こむぎっち」のモチーフである種子小麦は、日本有数の産地である。

イ 本校は、大型ショッピングモール「ウニクス上里」の近くにあり、住宅開発が進み、上里町で5校ある小学校のうち一番大きな学校である。通常学級18、特別支援学級4、合計22学級、全校児童513名の学校である。外国籍児童が多く、約50名、11ヶ国程度の児童が通っており、日本語を学ぶ教室として日本語学級を設けている。今年度、本校は創立50年を迎える。年々増える外国籍児童を含め、健やかな児童の成長を目指し、温かな地域と共に教職員約50名で学校教育を推進している。

(2) 研究テーマとの関わり

本校では、学校教育目標である「かしこく なかよく たくましく」のもと、一人一人が輝き、互いに高め合う上里東小学校を目指している。また、「自分に負けるな」「うそをつくな」「弱い者をいじめるな」という「3心」をもった児童たちの育成に取り組んできた。その中で、児童同士が、学級に在籍している外国籍児童の困り感を知り、自分たちができることを考え、進んで行動することができるよう、様々な教育活動に取り組んでいる。

2 具体的な取組

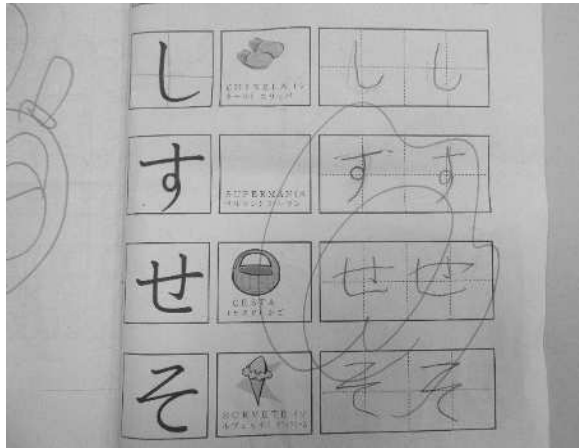
(1) 外国人との共生社会に関わる講座（東京出入国在留管理局）

昨年度、東京出入国在留管理局に依頼し、【外国人との共生社会の実現、やさしい日本語の必要性】の講話を5年生が受けた。児童は、日本人と外国人が仲良く暮らし、共に輝く社会のことを「共生社会」ということを学んだ。また、外国人が安心・安全に生活するための情報やルールが記載されているガイドブックを読み、相手に伝わりやすい「やさしい日本語」の具体例を知った。

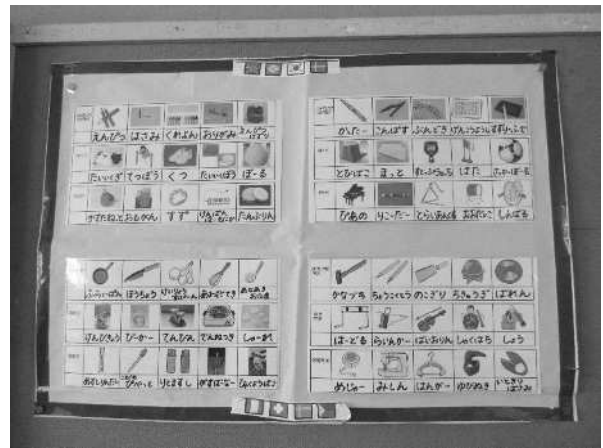
今回の講座を受けて児童は、教科書を「学校で使う勉強の本」、給食を「学校で用意するごはん」などと、わかりやすく言いかえる学習をした。そして、共生社会の実現に向けて、自分ができることを始めたいという思いをもった。

(2) 日本語学級

外国籍児童は日本語教室で日本語の読み書きをはじめ、国語や算数を学んだり、日本での生活に順応するための指導を受けたりしている。指導は、県費負担教職員2名が行っている。異学年の児童や滞在期間が短い児童も一緒に学ぶため、教員と個別に学習したり、児童同士で学び合いをしたりしている。日本文化についても学んでいる。日本語学級の指導により、児童は円滑に学校生活を送ることができている。



【音から文字を覚える学習】



【日本語学級の掲示物】

(3) 通訳との連携

本校には、通訳の町費職員が2名常駐している。保護者へ配布する便りや、保健関係の書類、保護者との連絡メール、校舎内の掲示物、面談の同席、授業の巡回など、様々な役割を担っている。常に、担任と細かく情報共有を図り、児童の様子や保護者の様子を確認して、児童がより良く生活できるよう支援している。多くの教職員が関わり、コミュニケーションを図ることで、児童や保護者の安心感を生み出している。

(4) 人権教育全体を通しての取組

人権尊重の大切さや基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けていくことを目的として、毎年2年生から6年生の児童が人権作文に取り組んでいる。日常の家庭生活や学校生活などで得た体験を作文にすることで、児童1人1人がこれまでの生活を振り返っている。児童が書いた作文は、代表児童が人権集会で発表し、全員が課題を共有し考えている。他者の考えを聴くことで、自身の考えと向き合うよい機会となっている。

また、長期休業日には、校内の教職員を対象にした人権教育研修会を開催し、外国籍児童への指導について、全国の事例をもとに研修を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

外国人との共生社会に関わる講座を受けたことで、児童が身近な外国籍児童との望ましい関わり方について自分事として考え、協同的な関係を築く姿が見られるようになった。

また、外国籍児童への理解が深まり、友達と協力したり、友達を気に掛けたりすることが増え、児童の間により良好な人間関係ができた。外国籍の児童・保護者の困り感を具体的に把握し、事前に課題や障害を克服できるような措置を行うなど、日々の学級経営に生かすことができた。

(2) 課題

課題は、多国籍化する学校において、児童へ適切な配慮と支援をしていくことや、在籍する学級と日本語学級との連携を密に行い、在籍する学級でも外国籍児童にとって教育的価値の高い活動を展開していくことである。教職員が、外国籍児童の困り感を知り、児童が自ら考えて行動できるよう適切な支援を研修しながら、引き続き児童の育成に取り組むたい。